

え？ 私、悪役令嬢だったんですか？
まったく知りませんでした。



トーマス・ハマー

貴族院の3年生。
侯爵家の三男で、パトリシアの婚約者。



ドロシー・ワグナー

貴族院の2年生。
男爵位を持つ商家の娘。



マーティン

貴族院の2年生。
パトリシアと同じクラス。生徒会書記。

ルイス

貴族院の2年生。
ドロシーと同じクラス。
生徒会会計。

クレイン

貴族院の3年生。
生徒会副会長。



ミーナス

貴族院の2年生。
パトリシアと同じクラス。
親同士の仲が良く、パトリシアとは
入学前からの友達。



ファルディ

ジェード家に仕える従者。
パトリシアの父を
尊敬している。



レンフォード

貴族院の3年生で、生徒会長。
スウェード国の第三王子。
自分の名前も顔も知らなかった
パトリシアに興味を持つ。

パトリシア・ジェード

貴族院の2年生。毎日図書室で
本を読んでいる伯爵令嬢。
人の名前を覚えるのが苦手で、
交友関係が狭い。

プロローグ

スウェード国では十五歳になると、三年間貴族院に通わなくてはならない。

かく言う私、パトリシア・ジェードも伯爵家の娘として貴族院に通い始めて二年目になる。そんな貴族院では、最近とある噂が生徒たちの間で話題になっていた。

「あの方が、今日もドロシー様をいじめていたらしいのよ」

「あの方が、ドロシー様のドレスを破いたそうよ」

私は普段からあまり噂話に興味がないため、耳に入れないようにしていたのだが、聞きたくなくとも聞こえてくる。

それが『あの方』の話だ。

「あの方が、ドロシー様に泥水をかぶせたらしいわ。びしょ濡れで泣きながら教室に入ってきたの」

「あの方とドロシー様が婚約者を取り合っていたらしいわよ」

あまりにも至る所から聞こえる噂話にうんざりして、私はため息を吐く。

「それにしても、最近あの方の話ばかりね……」

ぼそりと呟くと、急に声をかけられた。

「君、あの方が、わかっていないのかい？」

（あら、この人はあの方について知っているのかしら？）

正直言うと、『あの方』が誰であつても自分には関係ない。もちろん、噂話の的になっている『あの方』は大変だと思うけど、自分に害がないのであればそれでもいいと思ってしまう。

「ええ。別に私には関係ないので。それでは失礼いたします」

私は話しかけてきた人の横を通り抜けて図書室へと入った。

「面白い人だ」

すれ違いざま、そんな声が聞こえた気がするが、私は気にも留めずそのまま足を進めた。

図書室に入ると、同じ貴族院の中とは思えないほど静かな空間が広がっている。

私はこの静寂が好きだった。日常と遮断されたような空間で、色々な世界の話を読むのが日課になっている。

「はあ、この時間が一番落ち着くわ」

本が昔から好きだということもあるだろう。読めば読むほど知識が増えて世界が広がり、自分ができることも少しずつ増えていく。その感覚がたまらなく好きだった。

それに、貴族院を卒業したら大体の貴族令嬢は結婚することになる。できれば結婚しないで働きたいところだけど、そうはいかない。だからこそ、今のうちに色々勉強しておきたかった。

「今日は昨日の続きから読みたいわね」



私は、図書室をぐるりと回って昨日と同じ本を手にとると、いつもの席へと腰を下ろした。ふと窓の外を見れば、これから帰る人たちが賑わっている。

友人同士で楽しそうに笑い合いながら帰る人。

校舎の間で制服のままボール遊びをする人。

男女で腕を組みながら帰る人。

(これからデートにでも行くのかしら)

同じ貴族院にいるはずなのに、窓の外と中はまるで別世界のようだ。

数人しかいない図書室には、本のページをめくる音だけが響いている。

(この音、やっぱりいいわね)

私もページをめくる手を止めることなく、本の世界へ没頭していった。それからしばらくして――

「君。窓の外を見た方がいいんじゃないかい？」

(ちよっと、邪魔しないでよ)

「聞こえていないの？ おかしいな……」

私は小さくため息を吐くと、声のする方へ顔を向けた。

「もう、何よ。今いい所なのよ？ 邪魔しないでくれない？」

そこには、先ほど図書室の前で声をかけてきた男が、にこやかな笑みを浮かべながら私の向かいに座っていた。

(図書室の前で話しかけてきた人よね。でも、どこか見覚えがあるような……)

きらめく白銀の髪と淡い桃色の瞳。一度見たら忘れることはない容姿のはずだが、どこで見たのだろうか。

(せめて袖のラインがあればいいのだけど……)

残念なことにブレザーを脱いでいるから学年まではわからなかった。

私は小さく肩を竦めると、仕方なく言われた通りに窓の外へ視線を向ける。すると、外から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ドロシー、早く街へ行こう。今日はどこに寄ろうか？」

「トーマス様。最近流行っている歌劇場で演劇を見るのはいかがでしょう？」

「それはいいな。時間まではカフェでゆっくりしようか」

「まあ、いいですね！ さあ、早く行きましょう」

(あれは……トーマス様？)

婚約者であるトーマスと知らない女が手を組みながら歩いている。

窓越しということもあり、全ての声は聞き取れないが、どうやらこれから出かけるようだ。

そんな二人を見ている周りの目は冷ややかだった。

それもそのはず——婚約者がいるのに別の女と歩くというのはあまりいいことではないのだから……。大抵の令嬢は婚約者のいる男に近づかないし、逆もまたしかりである。

(そういえば……ドロシーって、どこかで聞いたことがあるような……)

私は二人が校門から出ていく姿をそのまま見送ったが、全く思い出すことができなかった。本に視線を戻そうと前を向くと、声をかけてきた男がまだ座っている。

「えっと……まだいたのですね？ 私に何かご用でしょうか？」

私の顔に何かついているだろうか。

なかなか席を立とうとしない男を見て首を傾げると、男はまるで珍獣でも見るような目でこちらを見ていた。

「外にいたのは、君の婚約者じゃないのかい？」

「ええ……一応婚約者ですね」

「一応って……」

一応という言葉に間違いはないのだから仕方ない。

ジェード伯爵家には私以外の子供がいない。そのため爵位を受け継ぐには親族から養子を迎えるか、私が婿を取るしかなかった。

幸い、親交のあったハマー侯爵家の三男がちやうど婿入り先を探していたこともあり、この縁談が進んだという感じだ。

私はトーマスのことを思い出して小さくため息を吐いた。そして、現実を忘れるように本へと視線を戻す。

「最初は気にしていました。でも今さら悩んでも変わりませんし、あの男のことを考えているより本を読んでいる方が有意義です。……それに、愛がなくても家は継げますしね」

「君はそれでいいの？」

(別にこの人には関係ないと思うけど……)

「それで……とは？ いいとは思っていないですけど、実害は出ていませんし。今は今できることをやりたいと思っております」

そう言って私は本を指さす。

領主としての仕事を引き継ぐには、様々な知識が必要になる。トーマスと出かける時間があるなら、その時間を勉強に充てたい。

「本当に、気がついていないんだな……」

男の小さな呟きに、思わず顔をしかめる。

「気がついていない……ですか？ 先ほどから何が言いたいのか全然わからないのですが？」

私が首を傾げると、男は首を横に振った。

「いや、君が気づいていないならいい。だが、何かあったら僕を頼ってくれ」

そう言って男は立ち上がると、そのまま図書室を後にした。

「『頼れ』って言われても、あなたの名前すら知らないんだけど……」

私の言葉に返してくれる人は誰一人いなかった。

最近貴族院はある噂で持ちきりだった。

噂されているのは『あの方』だ。だが、聞いた噂はどれもくだらない内容ばかりだった。

「レンフォード殿下。どこに行かれていたのですか？」

「ちよつとそこまで散歩にね」

「散歩にしては長かったですね」

生徒会室に戻ると、柔らかなミルクティーブラウンの髪と、澄んだアイスブルーの瞳を持つクレインが、目を細めてこちらを見ている。

(あれは疑っているな……)

僕は肩を竦めてから、どこに行ってきたのか簡単に話した。

「ちよつと噂の『あの方』に会いに行ってきたんだ。誰も名前を出さないから作り話なのかと思っていたが、本当に存在するんだね」

(本に夢中で、自分の婚約者の話なのに興味なさそうだったな)

噂の的になっているパトリシア嬢に、試しに鎌をかけてみたが、話に乗るところか興味すらないという感じだった。

「少し話してみたが、あの子が噂のようなことをしているとは思えなかったな」

クレインと話していると、生徒会室の扉が開いた。赤みがかったブラウンの髪に、オリーブ色の瞳をした優しい青年が入ってくる。

「なんか面白い話をしていますね。俺も仲間に入れてくださいよ」

そして、近くにあった椅子に腰を掛けた。

「マーティン。君は『あの方』に会ったことがあるかい？」

「話したことはないですけど、見たことはありますよ。同じクラスですからね。というか、貴族院で『あの方』を見たことがない人の方が少ないんじゃないですかね。何しろこの貴族院で一番美しいとされている方ですから。レンフォード殿下も覚えていないですか？ 昨年の入学式のこと……」

マーティンは頭の上で両手を組むと、背もたれに体重をかける。

僕は、去年の新生入生に、ひと際美しいと話題になっていた人がいたのを思い出した。

（確かに……あの時はすごかったな）

入学式を終えてすぐ、廊下はたくさんの人で埋まっていた。初めは僕を見に来たのか……なんて自惚れたものだが、パトリシア嬢を見た瞬間、それはすぐに勘違いであったことがわかった。

真っ先に目を奪われたのは、腰まであるブルーシルバーの髪だった。そして、同じ寒色系の澄んだブルーの瞳と透き通るような白い肌。すつと通った鼻筋に大きな目の、まるで人形のような精巧な顔立ちをしていた。

僕の顔を見て、マーティンはニヤリと笑う。

「思い出しました？ あの時の殿下、面白かったですよね。『僕は見世物じゃない！』とか言っていて……皆が見に来ていたのはパトリシア嬢だったんですけど」

「忘れてくれ」

僕は額に手を当てて首を横に振った。

あの時どれだけ恥ずかしかったか……できれば忘れてしまいたいくらいだ。

「それにしても、殿下がご令嬢に興味を持つなんて珍しいですね。いつも名前を言われても覚えているかも定かではないのに」

マーティンが笑いながらこちらを覗き込んでくる。

確かに、僕が他人……しかも令嬢に興味を持つのは珍しいかもしれない。

第三王子ということもあり、継承権争いに巻き込まれないよう、いつも周りと深く関わらないようにしていたということもあるだろう。

それに、女性問題は面倒だということを、兄二人を見てよく知っていた。

そんな僕がパトリシア嬢の名前を覚えているのは、確かに珍しいことなのかもしれない。

「まあ、あれだけ噂になっていたからね。誰だって覚えているさ」

「そういうものですかね」

「そういうものだよ」

（僕を見ても本の方が大切なんて、本当に変わった令嬢だ）

マーティンの言葉を適当にあしらうと、僕は生徒会の仕事へと戻った。

（近いうちに、もう一度図書室に行ってみようかな）

一章 あの方

「おはよう。パトリシア嬢」

「おはようございます。えっと……」

図書室で話しかけられてから数日後――

私の周りでは以前と少し変わったことが起きていた。

それは、見知らぬ人に声をかけられるようになったことだ。

特に、今隣に座っている人は授業前に挨拶だけしてきて、机に突っ伏していることが多い。

（邪魔なわけじゃないからいいんだけど……）

ただ、顔が整っていることもあってチラチラこちらを見る人が増えて気が散るのは確かだ。

隣に座った人は全く気にしていないようだけど、できれば周りの視線が痛いから離れて座ってほしいものである。

私が、なるべく気にしないようにしながら授業の準備をしていると、前の席に座っていたハニーブロードの女の子がくると後ろを向いた。アメジストの瞳が私を射抜く。

「ミーナ。どうしたの？」

振り返ったのは、ミーナス・ハーモニー。

母親同士が友人同士ということもあり、彼女とは小さい頃から遊んでいた。そのため、お互いのことはよく理解している。幼馴染みでもあり、友人でもあり、姉妹でもあるような、そんな関係だ。

ミーナスは口を手で覆うと、私の耳元で囁いた。

「横の方、最近いつもシアの隣に座るけど知り合いなの？」

大きい瞳がきらりと輝いた。どうやら、ミーナスも気になっていたらしい。

（これはただの好奇心ね……）

私は隣に座る人へちらりと視線を送ってから、首を横に振る。

「それが、全くわからないのよ。ミーナは誰か知っているの？ どこかで見たことあるような気がするし……あまり交友関係が広くないから、話したことがあれば覚えてそうんだけど……全く記憶がないのよ」

私が答えると、ミーナスは目を大きく見開いた。

「本当に知らないの？」

ミーナスの声が教室内に響きわたる。

その声のせいで、室内にいた人たちが皆、一斉に振り返った。

（知っていないといけない人なの……？）

私は一度目を閉じて、自分の中の記憶を呼び起こす。

が、しかし――いくら考えても、思い出すことはできなかった。

「まったく知らないわ」

「そ、そうなのね……」

ミーナスは眉尻を下げて少し考えてから、私の耳元に口を寄せた。

「生徒会書記のマーティン・ルミナー様よ」

「へえ……そうなのね」

生徒会長と副会長は確か三年生だったと記憶はしていたけど、書記と会計が同じ学年にいたのをすっかり忘れていた。

「なんとなく思い出した？」

「え、ええ……なんとなく？」

正直言つて、名前は聞き覚えがあるけど、顔までは覚えていない。生徒会長も、副生徒会長も舞台上で話している姿を見たことはあったがそれだけだ。

「本当にシアは興味がない人のことはまったく覚えなから」

ミーナはそれだけ言うところりと向き直った。と、同時に先生が教室内に入ってくる。

「授業を始めるぞー！」

その声と同時に、皆がそろそろと自分の席に戻っていく。

授業は男女共通のものと、男女それぞれに分かれるものがある。男女一緒に受ける授業は数学やマナー、歴史、政治などの座学が多い。歴史はこの国の歴史から世界の歴史の様々なことが学べるし、政治については領地経営などにも役立つものが多い。女子のみの授業はダンスの授業をはじめ、裁縫、護身術の授業などがある。

（まあ気にしても仕方ないわね。今は勉強を楽しみましょう！）

隣の人が誰か考えるのをやめた私はそのまま先生の話に集中した。

それからあつという間に授業が終わり、教科書を片付け始めると、マーティンが話しかけてきた。「今日も図書室に行くのかい？」

隣に座ついても今まではまったく話しかけてこなかったのに、珍しい。

「ええ。図書室は色々な本が置いてありますし、勉強になりますので。では失礼いたします」

私が立ち上がると、マーティンも立ち上がる。きつと生徒会室に行くのだろう。

ミーナスに別れの挨拶をして、私は図書室へ向かった。しかし、マーティンはなぜか後ろをついてくる。

「あの……何か？」

何か用事があるのかと思つて振り返ると、マーティンは首を横に振ってから微笑んだ。

「いや、なんでもない。僕も図書室に行こうと思つてね」

まあ、図書室は私のものではないし、誰が図書室に行こうと関係ない。

（ジロジロこちらを見るのはやめてほしいけど……）

先ほどから感じる視線がいやに居心地悪い。

それから歩き続けること数分――

今日もいつもと同じように『あの方』の話が耳に入ってきた。今日の『あの方』は何をしたのかと噂話に耳を傾けていると、後ろから笑い声が聞こえた。

(そういえば、一人じゃなかったんだわ……)

「やっぱり気になるんだね」

「気になるというよりは『あの方』って暇な方なんだなとも思っているだけです。聞きたくなくとも耳に入ってくるので、ついつい今日は何をしたのかなと思ってしまうて」

『あの方』が誰か、まだ気づいていなかったのか」

すると、マーティンはぼそりと呟いた。後ろを歩いているから顔は見えないが、呆^{あき}れているような声に聞こえなくもない。

(知らない方がおかしいのかしら？ でも……)

「気づくも何も……誰も名前を言わないですよ？ どこに行っても『あの方』なんて呼び方のみですし……マーティン様は、もしかして、『あの方』についてご存知なのですか？」

私は少し歩くスピードを落として、マーティンの横に並んだ。

「ククッ……ククク……クハハハハハ！」

マーティンは手で口元を隠すと、廊下中に響き渡るような大声で笑い始めた。

(何かおかしいことを言ったかしら？)

私は首を傾げる。

それからしばらくして、マーティンは一通り笑い終わると、私のことを指さした。

そして、誰にも聞こえないような小さい声で囁く。

『あの方』は、パトリシア・ジェード。君のことだよ」

(えっ？ 私……？)

まさか自分の名前が出てくるなんて思ってもいなかった。

私は思わず、口をぽくぽく動かした。

いや、動かすことしかできなかったのだ。

「まるで魚みたいだね！」

そんな私を横目に、マーティンは笑いながら去っていった。

一方その頃——僕は生徒会室の窓から、校門前の広場を眺めていた。

この時間は意外に嫌いじゃない。多くの生徒たちが帰る時間帯ということもあり、様々な情報がそこかしこから聞こえてくるからだ。

「ドロシー嬢のドレスを破いたらしい」

「ドロシー嬢に足をかけて転ばせたらしい」

「ドロシー嬢が教科書を破かれて泣いていた」

(今日もパトリシア嬢の話題で持ちきりか……)

図書室でパトリシア嬢に会ってから、僕は彼女のことを少し調べてみることにした。

そしてわかったのは、全ての噂に「ドロシー」という令嬢が関わっているということだった。

(どうしてドロシーにだけそんなことをするんだ?)

そもそも、一度会話したから知っているが、パトリシア嬢はそんなことをする令嬢には思えない。むしろ、興味がないことにはとことん興味がないような気がした。

それに放課後廊下を歩いていた時に、とある場面を目撃したことがある。

『ドロシー』という女を認識したばかりのときの話だ。

「ドロシーは今日も可愛いな」

『ドロシー』という女の名前が聞こえたのでそつと近づいてみると、二人の男女がまるで恋人のように腕を組みながら学院から出ていくところだった。

(あれは……トーマス・ハマーか。ということは、腕に絡みついているのがドロシーという令嬢だな)

栗色の髪はふんわりウェーブがかかっている、目は大きく、唇には少し厚みがある。そして小柄ながらも女らしい体つきをしていた。

(守りたくなるような見た目はしているが……)

だが、パトリシア嬢と比べてしまうと勝てる要素はさらさらない。

(元気で明るいドロシーと、^{はかな}儚げで静かなパトリシア嬢か……真逆だな)

僕は図書室で会ったパトリシア嬢を思い浮かべる。

(パトリシア嬢がはじめか……そもそも『ドロシー』という名前すら知らなそうだがな……) そう考えながら、窓の外をもう一度見ると、先ほどよりも人の波が落ち着き始めていた。

僕は仕事を始めようと腰を下ろし、机の上の書類へ手を伸ばす。

すると——タイミングを合わせたように生徒会室の扉が開いた。

「お疲れ様です。レンフォード殿下」

「お疲れ様」

入ってきたマーティンはどこか上機嫌そうに口元を緩めていた。

(あんなに楽しそうなのは珍しいな)

「何か面白いことでもあったのか?」

思わずそう尋ねると、マーティンは意味ありげに笑った。

「最近、パトリシア嬢の隣に座って授業を受けているんですけどね」

(珍しいな。女を避けていたマーティンが、自分から近づくなんて)

きつと彼女が自分自身に興味を抱かないのもその理由の一つなのだろう。

「そういえば君たちは同じクラスだったな」

「ええ。それで今日、彼女が前の席の友人に『隣にいる人が誰か知っているの?』って聞かれていたんですよ」

「それで?」

「それが、全くわからないのよ。ミーナは誰か知っているの?」ですって」

「……ふっ」

思わず笑みが漏れた。

「友人も目を丸くしていましたよ。俺は笑いをこらえるのに必死でした」

「パトリシア嬢らしいな」

「でしょう？」

「それだけじゃないんですよ」

マーティンは楽しそうに身を乗り出した。

「図書室へ向かう途中、『あの方』の噂話が耳に入ってきて、パトリシア嬢が立ち止まって耳を傾けていたんです。きっと自分で足を止めていることに気が付いていないんだろうな」

マーティンは頬杖を突いて、視線を逸らした。

「……それで？」

「それから『あの方』って暇な方なんですネ。なんて真顔で言うものですから。ついつい笑ってしまつて……」

（パトリシア嬢らしいな）

「ククッ……」

そんな僕を見てマーティンは目を細めて得意げな表情をする。

「ねっ？ 面白いでしょう？」

「面白かったついでにもう一つ彼女に伝えてみたんです。『あの方は君のことだよ？』って……そしてたら口をばくばくさせて、まるで魚のようでした。いや、見ていて飽きないですね」

「その時のパトリシア嬢の顔を見てみたかったね」

「ククッ……それは残念ですね。ですが、まずは自分のお名前を伝えることから始めた方がいいのでは？」

マーティンの言う通りだ。パトリシア嬢は生徒会長で第三王子である僕のことを覚えていない。あれから数日経っているが、僕の名前を調べてすらいらないだろう。

「マーティンは伝えたのか？」

「ええ、彼女の友人が伝えてくれましたから。きっと覚えてくれたんじゃないですかね？」

「そうだったな……」

僕は気づかれないように小さく息を吐くと、机の上に置かれた書類を手を取った。

「え？ 私が『あの方』だったの……？」

私はマーティンの爆弾発言を聞いて、まさか噂の『あの方』が自分だったことに驚きを隠せないでいた。

（どうしたことかしら……私、いつの間にそんなことを……？）

噂が流れ始めた頃からの内容を思い出してみる。

『あの方が、ドロシー様を階段から突き落としたんですって』

『あの方が、ドロシー様の教科書を破いて捨てたらしいわよ』

『あの方が、ドロシー様をお手洗いに閉じ込めて水をかけたらしいわ』

確かに、毎回聞く『あの方』の行いには必ずと言っていいほど『ドロシー』という名前が出てきた。先ほど外でトーマスが呼んでいた人も『ドロシー』という女だ。

(とうか……『ドロシー』って誰よ。顔すら知らないんだけど)

私は本を読もうといつもの席へ腰を掛けたが、マーティンの言葉を聞いてからそのことで頭がいっぱいで、どうもページが進まない。

(『ドロシー』という少女はトーマス様の幼馴染みなのかしら)

以前、トーマスと交流を深めようと何回か食事に誘ったことがあった。その時、「幼馴染染の体調が悪いから」「幼馴染みが呼んでいる」など、毎回幼馴染みを理由に断られたことを思い出す。

(話の流れ的に、そういうことよね)

「……え? ということは、私が今までの噂のネタにされていたということ!?」

ガタンツ!

勢いよく立ち上がった拍子に、椅子が大きな音を立てる。図書室中の視線が、一斉に私へと集まった。と同時に、司書の鋭い声がこちらに飛んでくる。

「ここは図書室ですよ! 静かにしてください!」

私は思わず頬を赤らめた。

(しまった……図書室だったのを忘れていたわ)

「す、すみません」

周囲の人たちに頭を下げると、私は鞆かばんを持って、図書室を後にした。

沈む夕日に照らされた廊下を一人で歩く。

ずっと『あの方』は暇な人だなと思っていた。

(私って暇だったのね……)

橙だいだい色の光のせいだろうか、いつもは気にしないことも今日はなぜか気になってしまう。

私は近くにあった窓に手を伸ばすと、ゆっくり開いた。

涼しい風が火照った頬を冷やしてくれる。

「不思議なことも起きるものね」

私は窓の棧さんに手をつけて、深く息を吐いた。

ほとんど校舎に人が残っていないせいか、この世界にいるのは自分だけなのではないかと、変な気持ちになってしまう。

そんな時、迎えに来た侍女のデューダが目の前に現れた。

「お嬢様、どうかされたのですか?」

私は風で靡なびく髪を押さえながら、デューダを見た。

「デューダ、どうしましょう。私、いつの間にか幽体離脱ゆうたいりだつとかしていたみたいなの」

「幽体離脱ですか?」

「そう。それで気づかないうちにドロシー様に悪さをしていたみたい……」

デューダは首を傾げる。

「何を仰おほっているのかわかりませんが……お嬢様、幽体離脱なんてできたのですね」
真顔で返すディードのおかげで、自分の中の気持ちがひんやりと冷えていくのがわかる。

「何を言っているのよ。できるわけがないでしょ」

「はあ……ですが、お嬢様が言い出したのですよ？ それより早く帰りましょう」
(確かにそうね。何を言っているのかしら)

私は窓を開めると、鞆をディードに渡して再び歩き出した。

それにしてもおかしい話だ。普段から教室にいるか、図書室で本を読んでいるのがほとんどののに、いやがらせなどしている時間すらない。

「そ、そうよね。もしかしたら私に成りすました誰かが行ったのかもしれないわね」

「はあ……お嬢様に成りすませる人がいるなら拝見してみたいものですね」

ディードが淡々と答えるから、思わず笑い声が漏れた。

先ほどまで頭の中が整理できずにいたが、彼女の声を聞いてから脳がいつも通り回り始めた気がした。

(ミーナに聞いてみたら何か知っているかしら)

私は落ち始めた夕日を眺めながら帰路へついた。

そして翌日、貴族院に着くなり、また『あの方』の話が耳に入ってくる。

「昨日はドロシー様のブレザーがボロボロにされていたらしいわ」

「あの方がそんなことするのかしら……」

「やらかなそうに見えても、実際はわからないわよ。女の嫉妬ほど怖いものはないもの」

(ブレザーがボロボロね……そもそも私はドロシー様が何年生かすら知らないんだけど)

私は噂話を聞き流し、そのまま教室へ向かう。

教室に着くと、ハニーブロンドの髪がびよここと揺れているのが見えた。

(もう来ているわね)

私はそのままミーナスの席に近づいて声をかけた。

「ミーナ、おはよう。実はミーナに聞きたいことがあって……」

「シア、おはよう。どうしたのかしら？ 私でわかることであればなんでも聞いてちょうだい」

ミーナスは不思議そうに首を傾げる。

「あのね……今噂になっている『あの方』のことなんだけど、それって私のこと？」

自分が『あの方』かどうか聞くほど恥ずかしいことはない。

私はミーナスから少し視線を逸らすと、頬に手を当てた。

「ああ、聞いてしまったのね。確かに『あの方』とはシアのことよ。でも噂話の辻褄つじつまが合わないのよ。恐らくこのクラスの皆はわかっていると思うわ」

ミーナはそう言って周囲を手で指し示した。確かに、このクラスの人から『あの方』の噂話を聞いたことはない。いつも聞くとしたら廊下や校庭がほとんどだ。

「そもそもシアはいじめなんかする人じゃないし、そんなことしているくらいなら本を読んでいた

いと思うでしょ？ それに、ほとんど教室から出ないじゃない？ それをこのクラスの皆が知っているわ。噂しているのは他のクラスの人や、学年の違う人たちね」

（このクラスの人たちは、ちゃんと私を見てくれていたのね）

私はその言葉を聞いて、ホッと息を吐いた。

「このクラスの人たちは本当にいい人たちばかりね」

教室を見渡すと、皆がこちらを見て笑っている。どうやら私たちの話を聞いていたらしい。中には「うんうん」と頷いている人までいた。

その様子がたまらなく嬉しかった。

「ふふっ……そうでしょ？」

ミーナスがふわりと笑うと、私も思わず笑みがこぼれた。

「ありがとう」

「気にしないで〜！」

クラスの人たちにも感謝を伝えると、軽く手を振ってくれた。

（いい友人に囲まれてよかったわ。——それにしても、この噂話。どうやったらなくなるかしら……）

このままエスカレートすると、貴族院に通い続けるのが難しくなるかもしれない。

（気にしなければいいんだけど、そももいかなそうよね）

下手したらお父様、お母様の耳に入る可能性も高い。

私は自分の席に着くなり、深く息を吐いた。

「そんなため息ばかり吐いたら幸せが逃げるわよ！」

ミーナスがそんなことを言っていたが、今はそれどころではない。

（まずはトーマスとドロシー……二人の関係から調べる必要があるそうね）

真実を知らなければ、この噂は終わらない気がした。

それから解決策が浮かばないまま数日が経ち——

少しは落ち着くと思っていた噂話は減るところか、どんどんひどくなっていた。

そして、今まで『あの方』と呼ばれていたただだったが、いつしか『パトリシア』という名前が飛び交うようになっていた。

「ねえ、聞いた？ パトリシア様がドロシー様からトーマス様を奪ったらしいわよ」

「私も聞いたわ！ 婿^{むこ}が欲しくて、他にもたくさん候補はいたのに、わざわざトーマス様を選んだのですって」

「トーマス様も顔だけは整っていますものね」

「婚約者になってから、トーマス様は怒られてばかりいるらしいわよ」

「まさかパトリシア様がそんな方だったなんて……」

「しよせんは顔だけということですね」

（別に婿はトーマス様でなくてもよかったんだけど……）

そもそも無理やりトーマスを婿にと推薦すいせんしてきたのはハマー家だ。正直、トーマスには興味がなかったし、ただ婿入りさえしてくれればそれでもいいと思うようになっていた。

初めは夫婦になるなら仲良くできればと思っていたが、それも初めのうちだけだ。彼の態度を見て早々に諦めたといった方が近いだろう。

(確かに幼馴染みのことで何度か注意はしたけど……)

それは貴族として当然のことをしただけで、今は諦めていることもあつて注意することすらない。(まったく、いつの話をしているのかしら)

私は今日も噂話を横目を通り過ぎ、教室へと向かった。

自分の席に着くと、マーティンが隣に座る。

「いつの間にかまた噂が広がったようだね」

「ええ。あなたが教えてくれなければそもそも私の話だとは気づかなかったんですけどね。ですが、私の話だと聞いてからは色々辻褄が合つてスッキリしました。まあ、数日は現実逃避していました……」

私はマーティンに答えながら、遠い目をする。

いったいいつになつたら噂話がなくなるのか、噂の出所を探すところから始めているものの、なかなか掴めない。

(やっぱりあの二人が話を広げているのかしら)

もしかしたら『ドロシー』は悲劇のヒロインにでもなつたつもりなのかもしれない。

(ドロシーの顔すら知らないけど……)

ゴーン、ゴーン。チャイムの音と同時に先生が入ってきて、授業が始まる。

先生の話に集中していると、マーティンが小さい声で話しかけてきた。

「そういえば、最近また妙な話を聞いたんだ」

「妙な話ですか……?」

ここまで来たら、そうそう簡単には驚かない。

「なんでも君の婚約者の幼馴染みが悲劇のヒロインになりきっていてね。君のことを悪役令嬢と呼んでいるそうだよ」

(悪役令嬢ねえ……)

適当に流していたが、まさかの言葉に思わず立ち上がった。

ガタンッ!

「え? 私、いつの間にか悪役令嬢にされているの?」

柄にもなく授業中に大声を出してしまい、先生を含めたクラス全員の視線が集まる。

私のそんな姿を見て、マーティンは笑っていた。

「ジェード嬢。どうかしたのかい? 教科書に『悪役令嬢』なんていう言葉はないのだから……」

先生は眼鏡の縁を動かしながらこちらを見た。外の光が反射して眼鏡のレンズが怪しげに光る。

「すみません。なんでもないです」

私は椅子に座りながら、授業を止めてしまったことを謝罪した。

ミーナスは心配そうな顔でこちらを見つめ、マーティンはまだお腹を抱えて笑っている。

（何がそんなに面白いのよ！ 私は全然面白くないんだけど……）

次から次に出てくる新しい話題のおかげで、いつもなら面白い授業が、全く頭に入っていない。

そしてあつという間に時間は過ぎ――

（こういう時の一日って早いよね）

放課後、私がいつも通りミーナスたちと別れて一人で図書室に向かおうと、廊下を歩いていると、最近噂によく登場する人物が姿を現した。

（げ……今一番会いたくない人じゃない）

ダークブラウンの短髪を揺らし、ヘーゼルナッツのような色の瞳でこちらを睨みつけているのは、間違いなく私の婚約者――トーマス・ハマーだ。トーマスが一人でいるのは珍しい。

（関わりたくないけど、無視してまた根も葉もない噂が増えても困るものね……）

私は目を閉じて深く息を吐くと、無理矢理口角を上げた。

「トーマス様。お久しぶりです。こんなところで会うなんて珍しいですね。何かございましたか？」

「お前に言っておきたいことがあつて来たんだ」

「はい、なんででしょうか？」

靴が手がふさがっているため、首だけ傾げる。すると長い髪がぱらりと同じ方向へ流れた。

「お前がドロシーをいじめていると聞いた。そんなに俺のことが好きなのか？ だから俺と一緒に

いるドロシーのことをいじめているんだろう？」

（好き……？ そんなこと一度も思ったことがないけど）

トーマスは私が何も言わないのをいいことに話を続ける。その声が少しずつだが大きくなっていき、室内にいた人たちが一人、また一人と顔を出した。

「しかも俺とドロシーの仲を引き裂こうとしているんだって？ お前がそんな最低なやつだなんて思つてなかったよ。俺とドロシーはただの幼馴染みだ」

「はあ……」

（幼馴染みなら、何をしても許されるのかしら）

私は返す言葉が見つからず、適当に返事をする、トーマスが自分の前髪をくしゃりと掴んだ。そして、苦しそうな視線をこちらに向けると大声で叫んだ。

「こんなに干渉されるなんてもう限界だ！ この場をもって婚約は破棄させてもらいたい」

（……え？ 今、婚約破棄って言ったの？）

一瞬何を言われたのか、理解が追い付かなかった。

（時と場所を考えてよ）

私はそつと周囲を見渡した。廊下には生徒たちがまばらにしかいなかったはずが、いつの間にかたくさん集まり、私たちのことを好奇の目で見ている。

（婚約破棄はいんだけど……こんな公衆の面前で言うなんて、何を考えているの？ 私がトーマスのことを好きで、ドロシーとの仲を引き裂く？ そんなことあるわけないじゃない）

脳内を色々な言葉が飛び交う。開いた口が塞がらないとはこういったことをいうのだろう。

（一旦冷静になりましょう。今言い返すのは危険だわ）

私は目を閉じて深呼吸をすると、もう一度トーマスを見た。

しかし、トーマスは私の返事を待つことなく、すでに踵を返していた。

（身勝手すぎじゃない？）

私は息を吸い込むと、トーマスに聞こえるように叫んだ。

「わかりました。このお話はお父様にお伝えさせていただきます。返事はお父様からさせていただきますので、そちらをお待ちください」

今はこの嫌な雰囲気を取り除ける方が先だ。

私は冷静さを保ちながら、好きな図書室とは別方向に向かって歩き出した。

（図書室に行く予定だったから迎える馬車が来るまで時間があるのよね）

私は何度目かわからないため息を吐くと、家の馬車を待たずに乗り合いの馬車で家へと帰ることにした。

（お父様たちに伝えるのが一番辛いわね……）

父や母に何と言われるか……考えるだけで荷が重い。

「ああ、本が読みたかったな」

私の声は馬車の音に綺麗にかき消された。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

家に着くと、いつも馬車で迎えに来てくれる従者のファルデイが急いで駆け寄ってきた。

「言ってくださればお迎えに上がりましたのに、今日は早いですね」

「ええ、色々あってね。乗り合い馬車で帰ってきたのよ」

私は近くにいた侍女に鞆を預け、ファルデイと話を続ける。

「お父様に話があるのだけど、今度お父様がこちらに来るのはいつだったかしら」

ファルデイは少し考えてから口を開いた。

「そうですね。領地の予定が入っていると仰っていたので、一ヶ月くらい先だったかと……何か旦那様にご用がござりますか？」

（そんなこと言っていたわね……）

以前父が来た時の話を思い返す。

（鉱山が見つかったんだっけ……）

新しい鉱山が見つかって、それに合わせて隣の領地との間に汽車というものを走らせる計画があるのだと楽しそうに話していた。

何でも他の国に外交に行った際に汽車があり、こちらの国でも導入しようという話になったそうだ。そこで、うちの領地と隣にある領地で進めてみようと思ったのだ。

（あの時のお父様は子供のように目を輝かせていたわね）

「トーマス様はこのことを知っていたのね……」

両親が一ヶ月以上こちらに来ないことを知っていて、『婚約破棄』の話を出したのだろう。

「変なところで頭が回るのよね」

「どうかなさいましたか？」

ファルデイが不思議そうに声をかけてきた。

「いえ、何でもないので。ありがとう。あんなに楽しそうな顔をしていたし、お父様の邪魔はしたくないわね……そうね、手紙を書くことにするわ」

きつと直接話すよりはまだ伝えやすいだろう。

ファルデイと部屋の前で別れると、私はすぐさま机の前に腰を下ろした。

「はあ……手紙を書くのはいいんだけど、トーマスの印象が良すぎるから……なんて言われるかわいね」

トーマスは両家で食事をする際だけいつも愛想よくしていた。

そのため、父や母にとって悪い人という印象はないだろう。

「いいお婿さんになりそうね」

母はトーマスと会うたびに、そんなことを言いながら、穏やかな笑みを浮かべていたくらいだ。

（お父様はどう思っているかわからないけど……）

「本当に気が進まないわ」

婚約破棄が嫌というわけではない。この話をした時の両親のことを考えると胸が痛む、ただそれだけだった。

最近になって噂話がより過激になっていたのは、トーマスが全て私が悪いということにして婚約破棄の賠償金を払わせようと企てたからだろう。

（どこまで行っても姑息なやつだわ）

とりあえず、ハマー侯爵夫妻に話が届くより先に、父に今日の出来事を伝えないとならない。

ハマー家に先手を打たれば話はさらにややこしくなる。何せ相手は侯爵家。伯爵家の私たちより身分が上だ。揉め事になった時、周りが信じるのは間違いなくハマー侯爵だろう。

「まずは今日あったことと、今までのトーマス様の行動について伝えなくてはいいわね」

私は机へ向かい、便箋を取り出した。

「それから、今後のために証拠を残しておいた方がいいわね。何もしていないのに悪役になるなんてごめんだわ」

私はペンを持ち、まずは今日の出来事を一つ一つ書き留めていく。手紙を書き終えると、次にノートを取り出した。噂になっていたことや今まで起きた出来事の内容を、思い出せる限り書き連ねていく。

「それにしても、本当に根も葉もないことばっかりね。いつの間にこんなことをしていたのかしら」

自分で書いた内容を見て、私は力なく笑った。

これならさっさと婚約破棄しておけばよかったと後悔しかない。

「これで賠償金を払えと言われても、絶対に払いたくないわね」

それに、伯爵家の名に傷がつく可能性もある。

事業は信頼関係だ。今まで先代たちが築いてきたことを踏み躪るわけにはいかない。

私は考えを整理するように、ノートに書き殴った。

そして、全てを書き終えると、机脇にある本棚に目を向ける。

「……はあ、早く本の続きが読みたいわ」

その頃——仕事が一段落し、生徒会室には穏やかな空気が流れていた。

僕も最後の書類を書き終えて、用意してくれた紅茶に手を伸ばした。そんな時だった。

「そういえば……」

静かな室内にクレインの声が響く。

（珍しいな。こいつから口を開くのは……）

大抵こういう時に話し出すのはマーティンかルイスだ。クレインは話を聞いていることが多い。

「どうしたんだい？」

『あの方』……パトリシア令嬢でしたっけ。先ほど、婚約破棄するってトーマスが騒いでいましたよ」

クレインの言葉にその場にいた誰もが持っていた紅茶のカップを机の上に戻す。

室内に沈黙が流れ、そして——その空気を戻すように、マーティンが話し始めた。

「クレイ。それ本当？」

「はい。私がたまたま廊下を歩いていたら、急に大きな声で話し始めたんですよ。恐らく、あの場にいた生徒たちは聞いていたと思いますよ。結構人が集まっていましたしね」

「婚約破棄の理由はなんだって？」

クレインは両腕を組み、少し考えてから話し出した。

『『ドロシーはあくまで幼馴染みなのに俺のことが好きだからっていじめるなんて最低だ。だから婚約破棄をする』って言っていましたね』

「それ以外のことは？」

「それ以外……？ 特にないですね」

（いや、あるだろ！）

クレインはゆっくりカップを持ち上げると、そのまま紅茶を飲み始める。

（昔からこういうところがあるんだよな）

生徒会の四人は昔からの顔馴染みで、お互い小さい頃から知っている。

僕はマーティンたちを見たが、二人も「これ以上は無駄だ」とでもいうように肩を竦めた。

「ああ、でも……あの時のパトリシア嬢の顔は面白かったですね。皆さんが『面白い女』と言っていたのがなんとなくわかった気がします」

クレインはその時のことを思い出したのか「クッ」と笑った。一人で楽しそうにしているが、こちらには一切伝わってこない。

「それで？　どんなところが面白かったんだ？」

クレインに疑問を投げると、少し考えてから話を続けた。

『何の話しているんだろう？』　って顔されていましたよ。あとは『あなたのことが好きなんて思ったことありません』みたいな顔もしていました」

「へえ……」

初めて図書室で会った時も、パトリシアは外を歩いていた二人のことを見ようとしなかった。

（それよりも本の方が大事だという感じだったな）

僕も再びカップを持ち上げ、紅茶を一口飲む。

「最近、噂がどんどん過激になっていたからな」

マーティンが机の中央にあるクッキーを手にとると口に含んだ。

「ああ、僕のクラスまで話が届いていたね。まあ、信じている人の方が少ない感じがするけど、あの光景も見ちゃっているしね」

ルイスがマーティンの話に乗った。

（ルイスも二年だが、確か別のクラスだったか）

「あの光景って何だ？」

「レンは学年違うもんねー。僕のクラスにトーマス先輩の幼馴染みがいるんだよ。それで、よく

トーマス先輩がクラスに来ては幼馴染みと一緒に帰ったりしているんだよね。まあ、本当に幼馴染みなのかわからないけどさ」

ルイスも同じようにクッキーをばくりと食べた。

「そうか」

「そもそもパトリシア嬢本人はドロシー嬢の顔すら知らないだろうな。名前も最近知ったくらいだし。婚約破棄に理由があるとすれば、賠償金とかそっち狙いかなと俺は思っているよ」

確かにハマー家は侯爵の割に金に余裕がないと聞く。そのわりに煌びやかな生活を送っていると、貴族の間では有名な話だった。

「ちょっと調べてみる必要がありそうだな」

顎を両手に乗せて少し考えていると、皆が含みのある笑みを浮かべた。

「どうした？」

「レンにしては珍しいな。他人の噂話に興味を持つなんて」

「珍しい？」

僕は首を傾げる。

（普通だと思うんだが……）

ここまで噂が広がってしまっていては本人たち以外にも被害が出てしまうかもしれない。貴族院全体の風紀の乱れにもつながる。それに――

「気になるしね。一応生徒会長としてもやることはやっておかないと」

「へえ……」

皆は目を細めて頷いた。

（さっきからなんなんだ……）

しかし、そうは言ってみたものの、本当にそれだけなのか。自分でも答えはわからなかった。紅茶を飲み干すと、僕は三人の顔を見る。

「マーティンはパトリシア嬢近辺を、ルイスはドロシー嬢、クレインはトーマスについて調べてほしい」

「「わかった」」

それからあつという間に数日が過ぎ——生徒会室にはいつものメンバーが集まっていた。

「レン。話を聞いてきたぞ」

「僕も」

「私も聞いてきました」

それぞれが、調べてきた内容をまとめた書類を机の上に載せていく。

「え？ こんなにあるのか？」

たった三人の話だというのに十センチ以上ある報告書に目を見開いた。

「まあ『あの方』の話だからねえ」

「嘘か本当かわからないけど、些細なことでも色々な話が出てくるよ」

「そうですね。私も三年生から話を聞いただけですが、知らない人はいないくらい有名でした」

「そ、そうか……」

僕は軽く顔を引きつらせると、まずはマーティンから話を聞くことにした。

「マーティンから話を聞かせてくれ」

「わかった。俺は直接パトリシア嬢に婚約破棄されたのか聞いてみた。そしたら小動物のように顔をキョロキョロ動かしてから、なぜそのことを知っているのかと逆に質問されたよ」

（いや、広まっていなくても思っていたのか？）

婚約破棄の件から数日経つが、知らない人はいないのではないかというくらい話が広まっていた。

『あの方が婚約破棄されたらしいぞ』

『それ聞いた。俺も婚約申し込んでみようかな。あの顔なら、性格が難ありでも全然いいよな』

『確かに……実家は金持ちで爵位も手に入るんだろう？ だったらありだよな』

下卑た笑い声が耳に入り、思わず眉をひそめたものだ。

「それから？」

「『そうですね……聞かれてないかと思ったんですが、やっぱり聞こえていましたよね』って少し落ち込んでいたよ。その様子を見て『やっぱりトーマスを好きだったのか？』って思ったんだけどさ、次の一言でそれは全くことがわかったね」

「次の一言？」

「『安心してください。婚約者が好きだったから落ち込んでいるわけじゃないので。むしろあんな

常識のない人と離れられると思うと嬉しい限りです』だって」

マーティンは笑い交じりの声で続けた。

「そしたら、クラスの皆も聞いていたみたいでさ。どつと笑いが起きたんだよね。授業中だったんだけど、先生も笑っていたよ。まあ、傍げな印象があるし、あそこまではつきり言われちゃうとね。逆に清々^{すがすが}しかったよ」

（図書室にいるときもそんな感じだったな）

そもそも、婚約者がいるのに他の女と仲良くするというのがあるかない。この国は一夫一妻制だ。夫は妻を大事にするような国柄だし、離縁率も低い。

「そのあとは『ただ、婚約破棄するまでが大変なんですよ……』ってため息を吐いていた」

（一度婚約すると破棄するのは大変だからな……）

貴族の婚約は王族が証人となることがほとんどだ。そのため、どちらかに問題がない限り、なかなか婚約破棄は認められない。

（特に理由が恋愛関係だと、証拠などがないと難しいんだよね……）

別れ方次第では賠償金が発生する可能性すらある。

「そうだな。とりあえず落ち込んでいないようによかったよ。それでルイスはどうだった？」

マーティンの報告を聞き終えると、僕はルイスに視線を移した。

ルイスは少し背丈が小さいが、その分親しみやすいのか、男女問わず友人が多い。

（これも姉に囲まれた影響か……）

「ドロシー・ワグナー。ワグナー男爵家の三女だったよ。最近準男爵から男爵になったみたいだね」

僕はルイスが持ってきた資料に手を伸ばした。

（準男爵だったということは領地などは持っていないか）

この国では子爵以上にならないと領地がもらえない。そのため男爵や準男爵は王都に住んでいる者がほとんどだ。

「男爵になった理由は？」

「ドロシーの父親が大商人の息子で、お金にものを言わせたらしい。ほら、金さえ積めば準男爵から男爵になることもできなくはないでしょ？ もちろん、後ろ盾があればの話だけど……」

「確かにそうだな」

準男爵から男爵に上がるには二つの方法がある。

一つは王に認められるだけの功績を上げるか。

もう一つは、辺境伯爵以上の爵位を持つ貴族数名から推薦されるかだ。

前者であれば僕の耳に入ってこないわけがないから、後者だろう。

「でしょ？ それ以外にはあまりいい情報は得られなかったんだよね。クラスで結構嫌われているみたいでさ」

「だが、皆あの噂を信じていたんだろ？」

「信じていたというよりは、面白がっていたという方が正しいかも。なにせ相手がパトリシア嬢だ

からね」

学園一の美女の話となればそれだけで気になるらしい。

「なるほどな……それで、嫌われている理由は？」

「婚約者のいる男に近寄っていくらしいんだ。見た目はどちらかというと可愛い部類に入るからね。男好きのしそうな体型しているしさ」

ルイスは冗談交じりに、手でどういう体型なのかを表した。

「あと、男に話しかけるときは甘ったるい声で話すんだよ。あれは女を敵に回すタイプだね」

「だが、トーマスがいるだろ？」

「それがね、トーマス先輩がいない時を狙ってやるんだよ」

ルイスはまだ話の途中だというのに、両手を頭の後ろで組んで自分の席に戻っていく。

「あつ、あとドロシーの話じゃないけど、パトリシア嬢は意外にファンが多いんだよね。たぶん二年生の間では嫌っている人はいないんじゃないかな？」

「そうなのかな？」

ルイスはこくりと頷いた。

「そうそう。特に女性からの人気が高いんだ。いつも挨拶を返してくれるし、誰にでも分け隔てなく接してくれるからね。おまけにあのルックスでしょ？嫉妬するより仲良くしたいって思う人の方が多いよ」

（分け隔てなくというよりは覚えていなさそうだけだな）

「できれば僕もパトリシア嬢と仲良くなりたいよ。最近ドロシーのことを調べていたからか、チラチラこっちを見てくるんだよね。香水臭いし、できれば近寄りたくないんだけど……」

（すまないな）

僕は、心の中で一言ルイスに謝った。

「本当にどうしてトーマス先輩はあんな人が好きなんだろうね。僕だったらありえないや」

ルイスは言いたいことだけ言うと、「用事があるから」といって生徒会室から飛び出した。

その様子を見て、僕たちは肩を竦めた。

「ルイスはいつも慌ただしいな。じゃあクレイン、頼む」

「承知いたしました。トーマスという男ですが、一言で言うと『クズ』ですね」

「……クズ？」

「はい。見た目は浮気をするような男には見えませんが、どうやら二人のことを愛していたようですよ？」

「二人を？」

これを聞いてマーティンも身を乗り出した。

「なんでも、顔はパトリシア嬢、性格はドロシー嬢がタイプのようなですね。だから、結果的にどちらと結婚しても良いと思っていたようです」

ハマー侯爵家はとても古くからある貴族の家系だ。最近ではトーマスの兄が金を工面しようと動い

ているが、両親やトーマスのせいで家計が火の車だと聞いたことがある。

「どちらと結婚してもいいとは……？」

「今の状態でパトリア嬢と婚約破棄にでもなれば賠償金が支払われることになるでしょう」

現段階の噂話などを聞く限り、状況がパトリア嬢に不利に働く可能性が高い。

「そして、パトリア嬢と結婚すればジェード伯爵家の莫大なお金を手にすることができる。ルイスの話聞いた感じ、ドロシー嬢は頭がよくなさそうですし……何も知らずに付き合っている可能性が高そうですね」

（そういうことか……）

パトリア嬢に関しては気持ちが離れていつていると気づいたからこそ、早めに婚約破棄にもっていつて損害賠償をもらおうとしていたのだろう。

人前で婚約破棄を宣言したのも、パトリア嬢の有責を周知するのが目的だったに違いない。

「とことんクズだな……」

「クッ……そうですね」

「ふっ……そうだな」

心の中で言っただけの言葉が、いつの間にか外に出ていたらしい。

僕は皆からもらった書類を手に取ると、上から順番に内容を確認した。

（久しぶりに図書室にでも行ってみるか……）

お父様へ手紙を書いてから数日——久しぶりに、私は図書室へ足を踏み入れた。

（はぁ、やっぱりここが一番落ち着くわね）

本ならすぐに証拠を集めるべきなのだろう。それでも、今だけは本の世界に逃げ込みたかった。

私は図書室に着くと、いつもの窓際の席に座る。

窓の外で人は動いているのに、声はほとんど聞こえない。窓の向こうだけゆっくり流れていく絵画を見ているような錯覚に陥る。それが一人だけ別の世界にいるみたいで、そんな気分になぜされる。

（今日こそ、この本を読み切りたいわね）

私は本のページをめくり、以前読んでいた続きを開いた。

それから、自分の世界に没頭していると、ガタンツと小さい音が、椅子を引く音が響いた。

（この時間に図書室に人が来るなんて珍しいわね）

放課後の図書室は静かで、いつもいるのは同じ人たちばかりだ。

そう思いながらも本を読み続けていると、しばらくして、前の方から視線を感じた。

（何かしら……）

久しぶりの読書の時間だ。できれば邪魔しないでほしい。

だが、その後も一向に視線がなくなることはなかった。

(いったい何なのよ！)
「あのー！」

仕方なく前を向くと、見覚えのあるようなないような、やたら顔立ちの整った男がこちらを見ていた。

(あれ……？ どこかで会ったような……？)

しかし、思い出そうとしても思い出すことはできなかった。

「すみません。私の顔に何かついていませんか？」

三人から話を聞いた翌日、僕は久しぶりに図書室を訪れていた。

「この図書室も悪くはないな」

王宮にも図書室があり、そちらで本を読むことが多いため、貴族院の図書室に来ることはほぼなかった。

図書室に入ると、紙と、擦れたインクのおいが鼻腔を擦る。

「この本、初めて見るな」

手に取ったのは英雄伝説だった。新しめの本なのか、初めて見るので少しだけ胸が高鳴る。

周囲を見渡しながら、空いている席を探していると、窓際の一ヶ所だけ、神秘的な雰囲気を感じ

出している場所を見つけた。窓には外の大きな木の緑が映り込み、キラキラと輝いている。誰も近づけないのか、パトリシアだけが座っている。

(あの席が好きなのか)

以前会話した時もあの席に座っていたことを思い出す。

僕は静かにパトリシアの前に座った。パトリシアは本の世界に入り込んでいるのか、ページを静かにめくっている。

僕も本を読もうと本に視線を移した。

三十分くらい時間が経った頃、僕はふと視線を上げてパトリシアを見た。

じっと見つめていると、それに気づいたのか、パトリシアも顔を上げる。そして、目があつた瞬間、首を傾げた。

「すみません。私の顔に何かついていませんか？」

(……まさか、僕のことを本当に覚えていないのか？)

僕は的外れなことを聞かれたからか、一瞬言葉に詰まった。外に出るたびに色々な人たちに囲ま

れることが多く、鬱陶しいとさえ感じていたが……こんなに興味の無い顔をされたのは初めてだ。

「いや、顔はすごく綺麗だよ」

笑いながらパトリシアに言葉を返す。

パトリシアは「そうですか」と言ってまた本に視線を落とした。

普通の令嬢なら赤くなったりするのに、そう言ったそぶりもない。自分で言うのもなんだが、顔